

# バベジにおける分業と機械

——〈資本の生産力〉認識の形成（1）——

植村邦彦

## はじめに

「人間は、彼らの生活の社会的生産において一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる」<sup>(1)</sup>という1859年のマルクスの歴史観の表明は、通常唯物史観の定式化と呼ばれている。そのような受け取り方の問題性についてはここでは触れないが、これがそれまでの彼の思想形成の中間総括であることは確かである。

1843年、ヘーゲル法哲学との批判的格闘を通して「固有の対象の固有の論理をつかむ」<sup>(2)</sup>ことを自らの方法として自覚し、固有の対象を近代市民社会に見定めて以来、それを歴史的存在として、生成と揚棄との歴史の必然性において概念把握し、同時にそこからの人間解放の必然性を論定することが、マルクスの最も重要な課題であった。それが、固有の論理をつかむということの意味である。彼の歴史観形成の根拠はここにこそあるのであり、したがって彼にあっては、近代市民社会の理論的認識の深化と歴史認識の方法概念の確立とは、二つの別のものではなかったのである。

そして1859年のマルクスは、歴史認識の方法概念として「人間の物質的生産諸力」が最も基礎的なものであることを確認した。この概念は、1844年の『経済学・哲学草稿』において準備され<sup>(3)</sup>、1847年の『哲学の貧困』で一応の定式化をみるものであり<sup>(4)</sup>、また以後の経済学批判体系の構築の過程で、とりわけ1860年代における相対的剰余価値論の「理論的＝体系的な展開」<sup>(5)</sup>の基礎となるものであった。

この『哲学の貧困』や『経済学批判』序言では、生産諸力はさしあたり歴史貫通的範疇としてつかまれた上で、生産諸関係との「対応」が指摘されるにとどまっているが、しかしながら生産諸力は、特定の生産関係の下に包摂され社会的な形態規定を受けた、歴史的・具体的在り方において把握されることによってはじめて、歴史認識の方法概念として生きるというべきである。すなわち近代市民社会に即して言えば、生産諸力は生産手段の資本家の所有という生産関係の下で、相対的剰余価値生産の方法としてのみ発展させられるのであり、そこでは生産力の豊かさが生産者の貧しさと一対になって進むということ、しかし他方、そこでは資本の生産力という疎外され物象化された形態においてはあれ、社会的労働の生産力が資本によってはじめて開発・発展させられているのであり、現存の生産関係を掘りくずし、人間解放の基礎となるべき潜勢力がそこに形成されているということ、以上のいわば〈社会的労働の生産力と資本の生産力との弁証法〉の認識によってはじめて、近代市民社会の歴史性が連続と断絶の二重の視点においてつかまれうるのである<sup>(6)</sup>。

したがって、歴史認識の方法概念としてのマルクスの生産諸力概念は、1861—63年『経済学批判』草稿から『資本論』にかけての相対的剰余価値論の確立、すなわち、資本の「特殊な生産力」ないし「特殊な生産様式」<sup>(7)</sup>としての〈協業→分業＝マニュファクチュア→機械＝大工業〉把握の確立<sup>(8)</sup>を待つてはじめて、十全な規定性において成立したと言うべきであり、その意味で、相対的剰余価値論は彼の歴史理論と経済学批判との重要な結節点をなすのである。

この生産諸力概念の形成過程、資本の特殊な生産諸様式の具体的認識の深化の過程は、自明ながら、マルクスにとっては自らに先行する様々な思想家・理論家との批判的格闘の過程であった。それらの中でとりわけ重要なのが、スミスを別にすれば、バベジ (Charles Babbage, 1792—1871) とユア (Andrew Ure, 1778—1857) である。

マルクスの経済学批判は、スミスの『国富論』との格闘として1844年に開始されるが、資本の生産諸様式の具体的認識に関しても、やはり彼の分業論の批判的摂取がさしあたり最大の課題であり、その際にマルクスに最も大きな手がかりを与えたのが、ブリュッセル時代の経済学研究の過程で読んだバベジとユ

アの書であった<sup>(9)</sup>。そしてこの両者の書からの批判的摂取が、後の相対的剰余価値論の構築の際に改めて重要な契機となるのである。

筆者の主要な問題関心はマルクスの生産諸力概念の形成過程を検討することにあるが<sup>(10)</sup>、その準備的作業として、本稿ではまず、バベジの分業論・機械論を検討することに課題を限定する。この検討によって、マルクスが彼から何を学びえたかが明らかにされるであろう。ユアについては、次稿に期したい。

## 1. バベジの時代と問題意識

バベジ<sup>(11)</sup>の経済学上の名著『機械とマニュファクチュアの経済について』<sup>(12)</sup>は、1832年、イギリス産業革命が完成期に達し、確立した産業資本の下で「時間短縮立法の成立を求める大衆的運動が未曾有の昂揚を示した一時期」<sup>(13)</sup>に出版された。翌33年には、未だ児童・年少者を対象とするにすぎないとはいえ、「最初の本格的工場法」<sup>(14)</sup>が繊維工場に適用されることになるが、これは、工場においてすでに労働時間の短縮を可能にするだけの生産力の発展が実現されていること、そしてこれ以後にこそ、資本による相対的剰余価値生産の追求が本格化することを意味する<sup>(15)</sup>。そのような時代の中で、この書は産業革命の一つの理論的総括として迎えられたのである<sup>(16)</sup>。

バベジは彼の時代を何よりも国民の富の飛躍的増大の時代と認識したが、本来数学者でありながら、「過去10年間、機械的技術の様々な源泉に精通しようとして、イングランドと大陸双方のかなりの数の作業場や工場を訪問」(p. iii)してきた彼にとっては、イギリスに他国に卓越した繁栄をもたらしたものが、国民の消費にはいる「大量の便益品を形作るための道具や機械の考案の進展の大規模さと完成度」(p. 3)にあることは自明であった。この生産力の発展をもたらした生産様式の理論的な認識こそが、彼の第1の問題意識なのであるが、それは、イギリス国民として、この国の偉大さを生み出している「諸原理に無知であるとしたら、ほとんど言い訳は許されない」(p. iv)からであった。

この断言の背後には、諸原理の理論的解明によって解消すべきと彼が考えた、二つの「無知」がある。一つは、労働者の間に広まっている「職人自身の利害と彼らの雇主の利害とは一致しないという極めて誤った不幸な考え」(p. 250)

であり、その結果、機械の導入への反対や時には「価値ある機械」の破壊さえも行なわれるのである。他の一つは、生産力増大の国民的效果を認識しえない資本家や政府の「せまい見方」(p. 320)であり、そこから「物質的に改良の自然な進歩を妨げる」(p. 343) 初期的「独占」が結果するのである。この二つのうち、前者はスミスにとってはまだ問題とならなかったものであり、後者はまさにスミスの批判の対象であった。ここに、スミスの時代とバベジの時代との連続性と相異性とを見ることができる。

以上の問題意識に支えられたバベジのこの書の目的は、次のように述べられる。まず第1に「工芸やマニファクチュアへの機械の適用を規制する機械学的諸原理」(p. iii) を明らかにすること、第2に「そのような研究と密接に結びついた経済学の様々な問題」(p. iv) をあとづけ、いくつかの原理を示すこと、第3に、以上の研究を通して「可能な最低コストでよい製品を生産する技術」の追求に基礎づけられた「新しい製造制度」(p. viii) の重要性を明らかにすること、である。

この目的に従って、この書は「道具と機械の使用から生ずる諸効果と諸利益」(p. 1) を論じる第1部と、「機械の適用を規制し、我が国のすべての大工場の内部を支配する経済学的原理」(p. 119) を論じる第2部とに分けられている<sup>(17)</sup>。

## 2. マニファクチュアと機械

バベジは彼の認識対象を、当時の一般的用語法にしたがって「マニファクチュア」とよんでいるが、彼がこの言葉にこめている内容をまず確認しておく必要がある。

第2部の序論をなす第13章で、彼は〈making〉と〈manufacturing〉との相違を論じているが、彼によれば前者が「少数の個人の生産」を意味するのに対し、後者は「非常に多数の個人の生産」(p. 120) を指す、したがって労働者の集積＝協業を前提とするものであった。しかし両者の相違は単に量的ではない。「〈maker〉が〈manufacturer〉になろうと思えば……かの機械学的諸原理とは別に、彼は公衆に売る製品ができる限り小さなコストで生産されるよう

に、彼の工場の全体系を配置しなければならない。」(p. 121)

ここからわかるように、彼の言う「マニュファクチュア」とは、労働者の協業と一定の機械学的原理の応用とに基づき、最小コスト＝相対的剰余価値生産を目的とする資本家的生産様式、つまり家内制生産に対する工場制生産<sup>(18)</sup>である。スミスにはこのような明確な区別はなく<sup>(19)</sup>、その点に歴史的発展段階の違いを見てとることができる。しかし、工場の内実が問題である。すなわち、彼が機械学的原理とよぶものが明らかにされねばならない。

第1部の序論をなす第1章で、彼は「機械と〔それを充用する〕マニュファクチュアから生じる利益の諸源泉」(p. 6)を次の三点に整理している。第1、人間の力への付加、第2、人間の時間の節約 (the economy of human time)<sup>(20)</sup>、第3、外見上平凡で価値のない原料の価値ある生産物への転化 (p. 6)。

しかしこれらの例としてバベジが挙げるのは、てこ、ローラー、伝声管等の道具の使用であり<sup>(21)</sup>、第1部の以下の諸章で論じられるのも、単純協業における笛や信号といった「道具」の使用をはじめとするありとあらゆる労働手段の「活動諸様式の分類」(p. 1)とその力学的原理の説明である。したがって、彼はさしあたり道具と機械とを厳密な区別なしに一括しているのであり<sup>(22)</sup>、上述の三利益は、論理的には、およそ労働手段を使用する限りでの労働過程一般に当てはまるのであって、ここからは道具の使用に基づく本来のマニュファクチュアと機械制工業との区別は問題になりえない。

ただし、バベジが「マニュファクチュア」での労働手段の充用を問題にする場合、資本の下での労働者の協業が前提とされており、その限りで、彼の上述の三利益は、単純協業にとっても分業にとっても特徴的なこととしてマルクスが挙げた「社会的労働の自然力」の三効果、すなわち「活動範囲の拡大、一定の成果を達成する時間の縮小、最後に、ばらばらの労働者ではそもそも生み出すことができないような生産諸力の創出」(Ms. 61—63, S. 232)、と重なり合い補い合う形で、資本の下での社会的労働の生産力の諸効果を表現しているものと言することができる。

このように、第1部ではバベジは道具と機械とを厳密に区別することなしに、両者の使用から生ずる効果・利益を一括して論じていた。しかし、彼に両

者の概念的区別がないということではない。彼には機構としての機械の発生史的把握があるからである。

先に見たように、彼はさしあたりは道具と機械とを複雑さと動力の違いで大別したが、続けて機械を「第1、力の生産にたずさわるもの、第2、力の伝達と仕事の遂行とのためだけのもの」(p.16)の二つに分類し<sup>(23)</sup>、第2部で改めて道具の結合に基づく機構として機械を概念把握している。「各工程がある単純な道具の使用に帰せられている時、一動力によって動かされるこれらの道具すべての結合が、機械を構成する。道具の考案と工程の単純化には、おそらく作業にたずさわる労働者が最も成功する。しかしこれらのバラバラな技術を一つの機械へと結合させるには、全く別の習慣を必要とする。」(p.174)

ここでバベジは、「マニュファクチュアそのものの部分労働者が大いにそのために働いた道具の分化を機械の発明と混同している」(K. I. S. 369)スミスとは異なって両者を明確に区別し、マニュファクチュア的分業における道具の分化=工程の単純化を基礎とする道具から機械への発展の論理をつかむことによって、「産業革命の出発点になる機械」(K. I. S. 396)を概念把握しているのである<sup>(24)</sup>。しかし、この概念規定が分業に関する第19章の分業の効果を論ずる部分でなされていることからわかるように、彼が考えているのは「機械制生産の単純な要素」(ib id.)としての機械であり、「全体労働者にとってかわる機構としての機械」<sup>(25)</sup>についての認識は、スミスと同様彼にも欠如しているのである。

ただし機械制生産に関しては、「機械の採用にともなって労働者が排除されることへの関心は『国富論』の全編を通じて見出すことができない」<sup>(26)</sup>のに対し、バベジは「機械がある製品をつくるのに必要な労働を減少させないなら、それは決して使用されないだろう」(p.334)という言葉で、機械的生産力を把握し、機械が「これまで雇用されていた手労働の多くに取ってかわる傾向をもつ」(ib id.)事実を認識していた。その限りで、彼は機械制生産の原理を認識しえているのである。

しかし必要な労働の減少は二重の意味をもつ。つまり「ある製品をつくるためのより少ない人間〔必要労働者数の減少〕とより短い時間〔必要労働時間の

減少]とは同じことである」(Ms. 61—63, S. 316)が、機械を労働者を排除するものとみるか、労働者の生産力を高めるものとみるかは、機械の資本家的充用の本質理解にかかわる問題である。バベジ自身はこの二つの論点の間を動揺しつつ、究極的に機械を労働者に取ってかわる、したがって敵対するものとは見ていない。

これは結局、機械による労働者の排除ということの意味内容の理解にかかわる。機械の充用の意義を、熟練=成人男子労働の不熟練=児童・婦人労働への置き換えと労働力の等級制の解体とによる労働コスト引き下げにこそ見るユアとは異なり<sup>(27)</sup>、バベジは、機械の導入が一方で「必要な熟練の減少」(p. 336)をもたらすことを認めつつも、他方、それが同時に「以前より高度な熟練」(p. 335)への需要を創出することを重視する。ここから、「機械の使用が最初は労働を失業させる傾向をもつ」(p. 334)のは、必要とされる熟練の質の変化によるものであり、労働者の側の新しい熟練への適応次第では「機械はその最初の導入の時にさえ、人間労働を常に失業させるものではない」(p. 336)ことになる。

要約しよう。生産力の基底に分業を置き、機械を「分業の添え物 (Ms. 61—63, S. 249; K. I. S. 369)とのみ見ていたスミスとは異なり、バベジは分業とは独自に「必要な労働を減少させる」機械の生産力を認識した。しかしながらなお彼は、ユアとは違って、機械を分業にとってかわるべき相対的剰余価値生産の「最も強力な手段」(K. I. S. 425)とは見ておらず、したがって、資本の生産力としての機械の把握に関して、彼はスミスとユアの間位置するということができる。

### 3. 分業の原理

機械と機械制生産を以上のように把握しながら、バベジが資本の生産力の最も主要な契機と考えたのは、分業であった。「おそらく製造工業(manufacturing industry)の経済が依っている最も重要な原理は、仕事を遂行する人々間の分業である」(p. 169)

こうしてバベジはスミスと同様に分業を経済学の第一原理とした。しかしそ

のこの意味はスミスとは異なる。スミスにあっては、社会的分業と作業場内分業とが異質な労働の結合という同一性においてのみ把握され、同じ分業としてカテゴライズされることによって、分業が「文明社会の生産力と富裕の基礎」とみなされているのであり、その意味で彼の分業論は「生産力の理論と価値の理論との接点」<sup>(28)</sup>として、国富論体系の全展開の基礎をなしているのである。

それに対してバベジにあっては、分業は工場内部の経済原理として把握されており、「様々な職業への労働の分割」(p.169)とそれに基づく商品交換は「文明国」での自明の前提とされ、固有には論じられていない。

工場内分業についてのバベジの認識は一面ではスミスのそのままの継承であり、彼の描く分業像はスミスと同様、一定程度の熟練をもつ職人間の分業的協業である。彼は、分業の利益の諸原因に関する従来の議論を要約するとして、基本的にスミスが挙げた「三つの異なる事情」<sup>(29)</sup>を敷衍する形で次の6点を列挙し、その重要性を認めている。第1、技能の習得に必要な時間の短縮。第2、その際浪費される原料の節約。第3、ある仕事からもう一つの仕事へと移る際に常に失われる時間の節約。第4、道具の取り換えから生じる時間の損失の節約。第5、同一工程の頻繁な反復による熟練の獲得。第6、その工程を遂行する道具や機械の考案(pp.170—174)。

しかしながらバベジの分業把握は次の点でスミスと異なる。すなわち、スミスにとって分業の利益は「同一人数の人々がなしうる仕事の量の……大増加」とそれに基づく「普遍的富裕」<sup>(30)</sup>、つまり労働の生産力の増大にあったのに対し、バベジにあっては分業の利益はなによりも「製品の安価さ」(p.175)にあり、しかもそれは労働の生産力の増大による使用価値量の増大の結果としての個々の商品の価値低下、というスミスの脈絡においてではなく、むしろ生産過程の合理化による労働コストの直接的引き下げという側面から理解されているのである。

バベジは、上述の分業の利益の「6原理」だけでは「分業の結果としての製品の安価さを説明する」には不完全であるとして、次のような「全く顧みられることのなかった原理を付け加える。「すなわち、製造業主は、なされるべき仕事を各々が異なる程度の熟練や力を必要とする別々の諸工程に分割することに

よって、各工程に必要な熟練と力との正確な量を無駄なく買い入れることができる。他方、もし仕事全体が一人の職人によってなされるならば、その人は仕事を諸作業に分割した場合の最も困難なものを遂行するに十分な熟練と、最も力のいるものを遂行するに十分な強さを持っていなければならない<sup>(31)</sup>。(p. 175. 原文は全文イタリックの強調)

労働の生産力の増大それ自体ではなく、各部分労働が計量され等級付けされることによる各工程の低廉化と総体としての労働コストの節約、これがバベジの考える分業の最大の利益である。それ故彼は、「各工程の正確な費用」を知ることが資本家にとって「自分の製造する商品のコストを引き下げる」(p. 203) ためにいかに重要であるかを、特別に一章(第21章)を費して力説するのである<sup>(32)</sup>。このような価値合理性の貫徹は生産過程が資本の形態規定を受けていることの証左であり、この価値合理性の認識によって、彼は資本の生産力の意味を鮮明に示していると言える。

大工場の設立原理も、彼によればこの分業の原理に基づいて導出される。すなわち「そう分割することが最も有益である工程の数と、それに従事すべき個人の数とが確かめられれば、この後者の数の直接の倍数を雇用しないすべての工場は、より大きなコストで商品を生産することになろう」(p. 212. ここの原文は全文イタリックの強調)という、「倍数比例の原理」(Ms. 61—63, S. 230)である。

こうして、マニュファクチュア的分業から分業の原理として各工程の熟練の等級付けの原理と倍数比例の原理とを析出し、生産過程における資本家的計算合理性の貫徹を明確に描き出すことによって、分業が「資本の一つの特殊的生産力」(Ms. 61—63, S. 242)として、「社会的労働過程の質的な編制とともにその量的な規準と均衡をも発展させる」(K. I. S. 366. 傍点強調は引用者による)ことを強調した点に、バベジのスミスを超える分業把握の独自性を見ることができる。

#### 4. 機械制工業概念の欠如

このように、バベジが工場での資本の生産力の主要契機を機械ではなく分業

に求めたということ<sup>(33)</sup>が意味するのは、彼が産業革命後の工場を認識対象としながら、「近代的大工業の主要要因」<sup>(34)</sup>である機械制工業の独自制を把握しえず、それをマニュファクチュアから区別しえていないということである。

すでに見たように、彼のマニュファクチュア概念は本来のマニュファクチュアと機械制工業とを区別なしに含んでおり、彼は、一方では道具から機械への発展の論理を把握していながら、他方では、機械の導入による労働の排除を熟練労働の解体としてではなく、必要な熟練の質の変化とのみ見て、労働の分割＝編成のされ方自体の変化を認識していなかった。その結果、彼はマニュファクチュアでの人間の労働能力＝熟練に基礎をおいた労働の主観的分割と、機械制工場での工程の機械的・技術的分割との質的な違いを把握できず、後者を前者と同一視したのである。

バベジは「大工業を実はマニュファクチュアの立場からのみ理解している」(K. I. S. 370)というマルクスの批判は、以上のような意味において受け取る限り、正当である<sup>(35)</sup>。

以上のようなバベジの認識は、一面では当時のイギリスの現実の忠実な反映でもある。例えば、「イギリス世紀中葉の主導産業」であり、「当時としては最も発展した工場」<sup>(36)</sup>を持つ綿業においてさえ、その基幹をなすミュール紡績工場はなお基本工程における熟練労働とそれを頂点とする労働力の等級制とを必要としたのであり<sup>(37)</sup>、また「1820—30年代に産業部門として独立した機械製作工場」のように「部分的には機械による生産であっても、機械体系による全面的な機械的生産とはいえない」<sup>(38)</sup>工場では、一工程への機械の導入が必ずしも他の諸工程の変革＝編成替えをもたらしたわけではなく、そこでの資本の生産力の主要契機は、やはりなおマニュファクチュア的分業にあったのだからである。

総じて「紡績・織布および鉱山業における諸改良は、大体において労働力の節約を可能にするような性質のものであった」のに対して、「土木事業や機械工業、鉄・化学製品・陶器の製造業では、問題は、機械に付き添う半熟練労働者を見出すことではなく、成年男工を新技術で鍛えあげることであった」<sup>(39)</sup>とするならば、「我が国のすべての大工場」(p. 119. 傍点強調は引用者による)

を問題とする場合<sup>(40)</sup>、そこには大工場＝機械体系＝労働の不熟練化という等式は成立しないのである。

他面では、バベジの方法の問題が指摘されねばならない。すなわち、工場から労働編成をいったん抽象して労働手段のみを取り出し、それを技術的に考察（第1部）した上で、資本の生産力が社会的労働の生産力の領有に基づくものである限りマニュファクチュア的分業をも機械制工業をも貫通している社会的労働の量的な規準と均衡の側面を「分業」ととらえ、それを工場の経済原理＝資本の生産力の主要契機にすえる（第2部）、という方法である。この方法からは、労働手段と労働編成との独自の関連の仕方、両者の規定性如何、を問うことは不可能であり、したがって、マニュファクチュアと機械制工業との工程分割＝編成の原理の違いは把握されえないのである。そして、以上のような方法によって析出された「分業」の具体像を描こうとする場合、それはやはりなおスミスが描いたような古典的マニュファクチュアのうちに求めるしかなかったのではないだろうか。

かくしてバベジは、自らの方法＝篇別構成と認識対象とした現実の大工場の多様さそのものとに制約されて、機械制工業の特質把握には失敗し、「大工業を実はマニュファクチュアの立場」からのみ理解する地点にとどまった。しかし彼は、両者を概念的に区別しないことで、かえって両者を貫通する労働分割の原理を、旧い分業像にひきつけ過ぎつつも、明確に析出することができたのである。

すなわち、労働過程をその最も単純な諸要素に分割することで各部分労働のコストを引き下げるとする「バベジ原理」は、プレイヴァマンが強調するように「どのような状況の下であろうと、どのような熟練水準にであろうと、資本家社会におけるあらゆる形態の仕事を支配する基本的な力となる」<sup>(41)</sup>のであり、大工業においても、機械への「熟練の譲渡」による労働の不熟練化と並んで、労働コスト引き下げの一般的方法として「もっといやな形で再生産され固定されるようになる」(K. I. S. 445)ものにはかならないのである。

こうして、「分業」の利益が、製造業主＝産業資本家にとっては労働コストの節約に、したがって労働能力の再生産に必要な労働時間の短縮にあると明言

することによって、分業を資本の生産力として、資本による相対的剰余価値生産の方法として示したこと、他面から言えば、分業に従事する労働者は、スミスの考えた如き「働く自由人」<sup>(42)</sup>ではなく、資本家によって「正確に無駄なく」買われ、その下に包摂される生産力の一契機にすぎぬことを明瞭に語り出している点にこそ、バベジの経済学史上の意義があるのであり、この〈資本の生産力〉認識の成立という意味においてこそ、彼はスミスとマルクスとの間に位置付けられねばならないのである。

## (註)

- (1) K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Vorwort, MEW Bd. 13, S. 8.
- (2) id., *Kritik des Hegelschen Rechts-philosophie*, MEW Bd. 1, S. 209.
- (3) 「対象的世界の実践的産出、非有機的自然の加工は、人間が意識している類的存在であることの確証である。」(id., *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*, MEW EG I, S. 516) 「通常の物質的な産業……において、我々は感性的な・疎遠な・有用な諸対象という形態の下で、疎外という形態の下で、人間の対象化された本質諸力を見出す。」(ibid. S. 542—543)
- (4) 「社会的諸関係は生産諸力に密接に結びついている。新たな生産諸力を獲得することによって、人間は彼らの生産様式を変える。そしてまた生産様式を……変えることによって、彼らは彼らのあらゆる社会的関係を変える。」(id., *Misère de la philosophie*, Editions sociales, Paris, 1972, p. 119)
- (5) 内田義彦『資本論の世界』, 1966年, 25頁。
- (6) この論点については、平田清明「マルクスにおける生産諸力の概念について—生産諸力の弁証法」, 京都大学『経済論叢』第122巻第5・6号—第123巻第3・4号, 1978年11・12月—1979年3・4月, 参照。
- (7) Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskripte 1861—1863)*, MEGA II—3—1, S. 242, 243, 以下, Ms. 61—63 と略記して示す。
- (8) 「ここ〔相対的剰余価値論〕で問題になるのは、むしろそれ自体が資本家的(総じて社会的)生産の所産である限りでの労働の生産力……なのである。」(ibid. S. 229. 傍点強調はマルクス)
- (9) 読書=抜粋の時期は、1845年2—6月(旧 MEGA I—6, S. 597 f.) ないし 9月(id., *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, Berlin, 1953, Literaturverzeichnis, S. 1058, 1070) とされてきたが、同年3月執筆と推定されるマルクスの草稿(Über Friedrich Lists Buch “Das nationale System der politischen Ökonomie”, EDI, Paris, 1975, p. 96) にユアからの引用がみられるこ

とから、ユアについては3月以前と考えられる。バベジについては、新メガは同年秋の抜粋を指摘している (MEGA, op. cit. *Apparat*, S.145)。

- (10) なお、マルクスの生産諸力概念の形成に関する1844年『草稿』段階での問題点の一端については、拙稿「W・シュルツの〈分業と生産諸力の歴史哲学〉とマルクス」、『一橋論叢』第81巻第1号、1979年1月、を参照されたい。
- (11) バベジの人と生涯については、R. W. Van Norman, “Charles Babbage”, *The Journal of Industrial Engineering*, vol.16 No.1, Jan—Feb. 1965. 今井忍「チャールズ・バベジとその生涯」、『産業経理』1973年12月号、参照。
- (12) *On the Economy of Machinery and Manufactures*, London, 1832. 2 ed. 1832, 3 ed. 1833, 4 ed. 1835. 以下引用は第4版に依り、本文中に頁数を記す。
- (13) 戸塚秀夫『イギリス工場法成立史論—社会政策論の歴史的再構成』, 1966年, 258頁。
- (14) 吉岡昭彦「イギリス産業革命と賃労働」、高橋幸八郎編『産業革命の研究』, 1965年, 90頁。
- (15) 「イギリスの産業革命が1830—40年に終るということは、大工業の展開が一段落ついたという意味では決してなくて、むしろ、大工業が飛躍的に発展する条件がここで完了したという意味である」(内田, 前掲書, 25頁)。
- (16) この書はイギリス国内で1万部以上売れ、アメリカでも出版されたほか、独訳、仏訳、伊訳、スペイン語訳が出版された。L. Urwick, *The Golden Book of Management. A Historical Record of the Life and Work of Seventy Pioneers*, London, 1956. p.10, 13.
- (17) この書の初版は第1部12章, 第2部20章の全32章, 第2版以降は第2部に3章増補されて全35章からなる。後者の目次が、橋博『工場経営と作業分析』, 1970年, 4—5頁に、訳出されている。
- (18) この訳語については、佐藤正雄「原価管理研究序論—チャールズ・バベジの研究」, 『成蹊大学経済学部論集』第8巻第2号, 1978年3月, 51頁, 参照。
- (19) 「家内マニュファクチュア」という用例を見よ。A. Smith, *The Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan, New York, 1937, p.7. 大内兵衛・松川七郎訳, 岩波文庫, 第1分冊, 104頁。
- (20) バベジにおける「時間の節約」があくまで必要労働時間の短縮であり、彼に労働日短縮や工場法への関心が見出せないことについては、拙稿「W・シュルツの『自由時間』論—マルクスの時間の弁証法の一源泉」, 『一橋研究』第3巻第3号(通巻41号), 1978年12月, 参照。
- (21) この例の不適切さと繊維業での機械的発明への関心の乏しさを、すでに同時代人が批判している。anon. “Babbage on machinery and manufactures”, *Edinburgh Review*, vol. 56 No.112, Jan 1833, p.313 f.
- (22) 「道具と機械との違いはあまり正確に区別しえない。……道具は普通機械より

単純である。それは一般に手で使用されるが、機械はしばしば動物力や蒸気力によって動かされる。」(Babbage, op. cit. p.12)後にマルクスが批判するように、問題は両者の歴史的規定性にある。1863年1月28日付エンゲルス宛書簡(MEW Bd. 30, S.320)および『資本論』(*Das Kapital I*, MEW Bd. 23, S.391—392. 以下, K. I. と略記する), 参照。

- (23) この分類は、基本的にユアを経てマルクスに受けつがれる。ただしユアは動力機・伝導機・作業機に三分類しており、マルクスもこれを踏襲している。A. Ure, *The Philosophy of Manufactures*, London, 1835, p.27. Marx, K. I. S.393.
- (24) この点については、仲村政文「C・バベッジの生産力論について」、鹿児島大学『経済学論集』第7号, 1971年2月, 183頁, 同『分業と生産力の理論—史的唯物論と生産力』, 1979年, 68頁, 参照。
- (25) 水田洋『アダム・スミス研究』, 1968年, 172頁。
- (26) 小林昇『経済学の形成時代』, 1961年, 171—172頁。
- (27) Ure, op. cit., pp.19—20, 23.
- (28) 内田義彦『経済学の生誕』増補版, 1962年, 233頁および218頁。
- (29) Smith, op. cit., p.7. 邦訳, 105頁。
- (30) ibid., p.7, 11. 邦訳, 105, 112頁。
- (31) ブレイヴァマンはこの原理を「バベッジ原理」とよび、「資本家社会における分業の発展にとって基本的なもの」と極めて重視している。H. Braverman, *Labor and Monopoly Capital. The Degradation of Work in the 20th Century*, New York, 1974, pp.79—82. 富沢賢治訳, 87—91頁。仲村氏も、この「工程の計画的・技術的な編成」の認識を、バベッジの最大の意義としている。前掲書, 59頁。
- (32) ここから「科学的管理法の父」(Van Norman, op. cit., p.3), 「テイラーの最も直接的な先駆者」(Braverman, op. cit., p.89. 邦訳, 98頁)というバベッジの位置付けが生じる。ただし当時の評価は「非実際の変人」であった。E. J. Hobsbawm, *Industry and Empire. The Pelican Economic History of Britain*, vol. 3, Penguin Books, 1969, p.122.
- (33) この分業への力点は、「機械の使用に適した事情」(第28章)を特定して論じるということにも現われている。
- (34) P. Mantoux, *La Révolution industrielle au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1959, p.18. 徳増栄太郎他訳, 24頁。
- (35) 仲村氏は、バベッジの機械論の水準の高さから考えてマルクスの批判は「必ずしも妥当ではない」(前掲書, 65頁)とし、バベッジは「分業に力点を置きながらも実質的には工場制度の内部構造の考察を進めている」(同上, 71頁)と述べるが、問題は分業への力点の置き方にあるのであって、そこに実質的には大工業を対象としながらそれを「マニユファクチュアの立場からのみ理解している」と評価さ

れる根拠があると言うべきである。また後藤邦夫氏は、ユアよりもバベジのほう  
が「19世紀中期以降における新しい産業の動向にたいしてむしろ敏感であった」  
（「資本主義的工業化とプロレタリアート」、『現代の理論』1972年1月号、52頁）  
という評価に基いて、マルクスの「バベジに対するこの評価には問題がある」  
（同上、54頁）とするが、1830年代前半の著作が19世紀中期以降の動向に敏感で  
ありえたとする根拠は明確でなく、納得しがたい。

- (36) 堀江英一編著『イギリス工場制度の成立』、1971年、第4章、201、200頁。
- (37) 吉岡、前掲論文、59—61頁。
- (38) 堀江編、前掲書、第3章（塩見治人）、146頁。
- (39) T. S. Ashton, *The Industrial Revolution 1760—1830*, London, 1948, p. 120.  
中川敬一郎訳、岩波文庫、137頁。
- (40) バベジが大工場・大施設として論及しているのは、ピン製造業、鋳山業、印刷  
出版業、織布業、製鉄業等であり、機械制生産の導入の程度は様々に異なる。綿  
紡績業への特別の注目は見られない。
- (41) Braverman, *op. cit.*, p. 82. 邦訳、90頁。
- (42) 星野彰男『アダム・スミスの思想像』、1976年、211頁。内田、前掲書、263—  
264頁、をも参照。

（筆者の住所：東京都国立市谷保6205 アパルトヤガワ2—G）